

## 『東谷御林人参一卷』と松平君山<sup>(1)</sup>

安江政一

### 一 はじめに

『東谷御林人参一卷』(以下『一卷』と略記)は江戸時代の中頃、尾張藩において朝鮮人参を大規模に栽培した時、人参掛役人がメモとして作った実践の記録である。この古文書の由来と内容については既に報告したので、ここでは栽培の指導者松平君山との関連について考察する。

### 二 栽培の行われた時代

尾張藩における人参栽培の開始は、宝暦十三年(一七六三)であるから、栽培による人参国産は既に成功し、幕府は人参の製造販売を官営とし、増産を計画して人参の生根や果実を民間から買上げている頃であった。<sup>(3)</sup>栽培に関する指導書には田村藍水の『人参耕作記』があり、平賀源内の「人参培養之法」<sup>(5)</sup>も公刊されていた。また君山は自邸の植物園において人参の見本を栽培し、生薬を製して藩主に献上していた。<sup>(6)</sup>このように君山が栽培に着手した時には、本草学的研究のうえからも、君山自身の経験からしても、人参生産の見通しは明るいようにみえていた。

### 三 栽培の経過

栽培の行われた入尾村は東谷山の麓で、尾張藩の初代藩主義直の墓所、定光寺に近い所である。君山は人参栽培決定の後、蒔付場の選定には立合わず、御林奉行所の役人が東谷山の藩有林の中に六ヶ所を見立てて開墾し、花壇状の植場を作った。君山は宝暦十三年夏、四万粒の人参実を蒔き<sup>(7)</sup>終った時、初めて植場を視察している。

第二年目の宝暦十四年は明和と改元された。この年、新たに六ヶ所を開墾して三万五千粒の実を蒔いた。この年は発芽についての記録がない。第三年目、明和二年になって初めて発芽の状況がその率によって示されている。未年（宝暦十三年）蒔、申年（同十四年）生え、酉年（明和二年）芽出し一分六厘。申年蒔、酉年生え四分通とあるが、実際の本数は書いていない。発芽率の計算は一果実一本としているから、逆算すると宝暦十三年蒔は六千四百本、同十四年蒔は一万四千本となり、合計二万本で、苗の収量は一応満足すべきものといえよう。なお果実には種子一個のもの<sup>(8)</sup>と二個のものがあり、大小によって容易に区別できるが、君山はここでは注意していない。

第四年目、明和三年の集計では人参総数は四千本余に減少した。初生苗の露地における越冬はむずかしかった。植村左平次は人参養御用として<sup>(9)</sup>何回も日光に趣いてこの困難を克服した。人参栽培の難関は、種子から苗を作ること、第一回の越冬の二点であった。苗作りのことは文書になっていたが、寒養いのことはどこにも記されていない。これは土質を選ぶことによって解決されたと思われる。水はけがよくて乾きにくいという土の条件は腐植質を多くすることで満たされるのであり、人参栽培の秘訣は土作りにあった。この土の性質と越冬とは関係していたと思われる。

『二巻』の記載によると、君山は日覆に注意を払っているが、土に関しては全く無関心であった。明和五年春には人参の株数は八百に減少したので、土質不適と判断して栽培を中止し、その秋全部名古屋の薬園に移した。秋に掘った時の総数は二百余であった。こうして君山の指導による人参の栽培は成果をあげることなく中止となった。

#### 四 君山の本草学

君山は尾張藩における最高の学者であろう。『士林沂泗』、『張州府志』など重要な藩撰の記録を完成したほか多数の著作があり、詩人としても名高く、多くの漢詩を残している。『張州府志』には土産の項があつて本草学的な部分があるとされているが、実際には智多郡の土産の部に多数の貝類が図説されているが、他の編には本草学的記述はほとんどない。この当時には、全国各地で地誌が書かれ、その中には産物の項が設けられ、本草学的記事が加えられていた。尾張藩でも同様で、『張州府志』に少しおくれ内藤東甫が『張州雜志』<sup>(10)</sup>を著した。この中には植物の彩色写生図が多数あつて質、量共に君山を越えている。

吉川<sup>(12)</sup>は君山を尾張本草学一派として紹介している。明治前日本生物学史には君山を本草学者として、その経歴はかなりくわしく記しているが、本草学的業績は少なく、君山と秀雲を別人として扱ひ、山岡恭安を君山の門人とするなどの誤がある。狩野<sup>(11)</sup>の君山略伝には次のような記述がある。

「君山書に於て窺わざるなく、然も博覽強記、目一たび過れば終生忘れず。凡そ諸子百家より稗史野乘、本草の学に至る迄通ぜざるなし。また「君山最も物産を好み、山沢を歴遊する毎、嘉卉異常なるものに値へば採りて之を収め家園に移し置きて朝夕之を玩ぶ。諸を歴代本草に徴して名実相副ふを待ちて後已む也。好事の奇品を得て名を知らざれば則ち君山に就て正せりとぞ」。

これでもわかるように、君山は儒学者の教養としてあらゆる学問を修めた博学多識の人であつた。本草学も専門家としてではなく、学者の教養として修めたのであり、野外の珍草奇木を集めて植えていたのは文人の趣味の一端であつた。この書にも、その他の伝記にも君山の人参栽培については記してない。それ故この『一卷』は新資料として貴重である。

名古屋市史の学芸編では本草学部において、君山を山岡恭安、杉山維敬と並べて同格に扱っている。<sup>(15)</sup>市役所編集の名古屋市史人物編においては、君山は医学、本草学の部には加えず、儒学、漢詩の部に編入してある。<sup>(16)</sup>彼は儒者として藩に仕

えたのであり、儒学において第一流であり、歴史、地理に明るかったとしても『一卷』でみる限り、当時の本草書を見ていなかったことは明白であり、そのため人參栽培に失敗しているから、名古屋市史人物編の評価は当たっているとすべきであらう。

## 五 いわゆる本草正譌論争

君山の本草学的著作は晩年の『本草正譌』<sup>カ17</sup>である。十二巻、六冊からなり、市中に流布する本草に関する諸説の誤を指摘して訂正するものである。この中には貝原益軒、松岡恕庵ら本草学の最高權威の見解の訂正も含まれている。

本草学はもともと中国において、利用できる天然物を用途、形状、存在場所など適宜の仕方でも分類記述したもので、長期間にわたって成立したため内容の精粗には大差を生じている。これをわが国の産物にあてはめ、新見解を盛って実践の学としたのは貝原益軒であった。二千種に近い漢土の産物の不完全な記述によってわが国の産物にあてはめるのは至難の事業であり、細部で多くのくい違いを生ずるのは当然であった。君山はよく野外で観察していたから益軒、恕庵の欠を補うところもあった。

君山の著が出た一年後、尾張の町医山岡恭安は、君山の誤を正すという意味の『本草正々譌』を出版した。恭安も門人に本草を講じていたので、市中の誤った説を記録していた。たまたま『正譌』が出たのでそれと比較して、もれている部分、意見の異なる部分をまとめて出版した。市橋はこれ<sup>18</sup>を論争としてとりあげているが、理論上の正否を争うものではない。本草学の大筋は肯定したうえで、市中に流れている誤の訂正と追加であり、小部分についての異なる意見の発表にすぎない。それでもこのような著作が君山の膝元から出たことは、君山の門弟らには甚だ不快であったらしく、門人の一人、杉山維敬は恭安の書の子細に点検してその誤を探し、『本草正々譌刊誤』を著して恭安に一矢を報いている。三者共本草学における多数の物品中の一部分の誤を指摘したにすぎず、三者は分量にはかなりの差はあるが、学問的レベルには差は

ない。これは本草学を医師が薬方書として用いる場合における正誤を目的としたものと見なすことができる。個々の項目では正否を争うものもあるが、全体として論争といえる類の著作ではない。この頃の本草学は実践の学として急速に進歩していた。君山と同じ時代に生きた本草学者阿部将翁、野呂元丈、丹羽正伯、植村左平次、松岡恕庵らと君山を同列に並べることができない。君山はあくまで博学多識の儒学者であって本草学者ではなかった。

註

- (1) 第八十四回医史学会総会にて発表（横浜、一九八三）。
- (2) 安江政一、薬史学雑誌、十八卷、第二号。
- (3) 今村鞆『人参史』第三卷、四七一、思文閣（一九七二）。
- (4) 田村藍水『人参耕作記』、延享四年（一八四七）完成。明和元年（一七六四）増補刻。
- (5) 平賀源内、『物類品隲』卷之六。この付録の一部に「人参培養之法」がある。
- (6) 市橋鐸、『松平君山考』二一、名古屋市教育委員会（一九七七）。
- (7) 人参の種子は乾くと発芽力を失うので始めの頃は熟した果実を直ちに蒔きつけて、翌年春まで発芽を待っていた。
- (8) 名古屋叢書、第十三卷、九一。君山は『本草正譌』の中の人参の項で、大粒は二顆、小粒は一顆と記している。
- (9) 今村鞆『人参史』（前出）第四卷、二八四挟込の表。なお佐渡における栽培研究でも、最初に得られた露地蒔の五本の苗は、その年の越冬に際して全滅した。安江、薬史学雑誌、十七卷第一号。
- (10) 名古屋市史、人物編、一、三六九、名古屋市役所（一九三四）。
- (11) 内藤東甫、張州雑誌、合本十二冊、愛知県郷土資料刊行会（一九七五）。原本九七、九八が産物であって、見事な植物写生図が多数取められている。
- (12) 吉川芳秋、日本医史学雑誌、一三〇一号（一九四二）。
- (13) 日本学士院、明治前日本生物学史、第二卷、三〇〇、三〇二、野間科学医学研究資料館（一九八〇）。
- (14) 狩野真一、『松平君山先生略伝』六、一四（一九三四）。
- (15) 名古屋市史、学芸編、一九七、愛知県郷土資料刊行会（一九七八）。

(16) 名古屋市史、人物編二、二二三、名古屋市役所（一九三四）。

(17) 『本草正々論』、『本草正々論』、『本草正々論刊誤』の三者は、『名古屋叢書第十三巻』、八七―一八七、一九二―二二九、二二三―二四一に全文活字にして収められている。

(18) 市橋舞、郷土文化、二巻、三頁、三四（一九四五）。本稿は註六および『東海郷土文化史考』、愛知県郷土資料刊行会（一九七五）にも転載されている。

（名古屋市立大学）

## The Manuscript “Togoku-Ohayashi-Ninjin” and the Scholar Kunzan Matsudaira

by

Masaichi YASUE

The ancient manuscript named “Togoku-Ohayashi-Ninjin” is a practical record of the large scale cultivation of *Panax ginseng* NEEDS in the Owari Clan in the middle of the Edo period from 1763-1770. Kunzan Matsudaira directed this cultivation. He was one of the greatest Confucian scholars in the Owari Clan. According to this manuscript this cultivation ended in failure. He was a great Confucianist, but he was not a herbalist.